

「私と私の家は主に仕えます」

副牧師：松坂 政広

<ヨシュア記 24章 11節～15節 新共同訳>

あなたたちがヨルダン川を渡り、エリコに達したとき、エリコの人々をはじめ、アモリ人、ペリジ人、カナン人、ヘト人、ギルガシ人、ヒビ人、エブス人があなたたちに戦いを挑んだが、わたしは彼らをあなたたちの手に渡した。

わたしは、恐怖をあなたたちに先立たせ、剣にもよらず、弓にもよらず、彼らと二人のアモリ人の王をあなたたちのために追い払った。

わたしは更に、あなたたちが自分で労せずして得た土地、自分で建てたのではない町を与えた。あなたたちはそこに住み、自分で植えたのではないぶどう畑とオリーブ畑の果実を食べている。』

あなたたちはだから、主を畏れ、真心を込め真実をもって彼に仕え、あなたたちの先祖が川の向こう側やエジプトに仕えていた神々を除き去って、主に仕えなさい。

もし主に仕えたくないというならば、川の向こう側にいたあなたたちの先祖が仕えていた神々でも、あるいは今、あなたたちが住んでいる土地のアモリ人の神々でも、仕えたいと思うものを、今日、自分で選びなさい。ただし、わたしとわたしの家は主に仕えます。」

<メッセージ>

【モーセの後継者ヨシュア】

毎週月曜日と金曜日に上野の森キリスト教会の中学生、高校生をはじめ LINE でみことばを分かち合わせていただいています。1年かけて創世記から申命記まで、いわゆるモーセ5書と呼ばれる律法をテーマとした聖書の最初の5つの書簡をじっくり読み進めてきました。

聖書には何が書かれていて、それがわたしたちにとってどういう意味があるのか。ことばを変えれば、聖書の物語がわたしたちの物語とどのようにつながっているのかです。

57名の人たちがこれまでLINEを通して聴いてきてくださいました。

ヨシュア記からは、分類上歴史書ということになりますが、ヨシュアは、モーセ直々の後継者でしたから、モーセ5書をしっかり受け継いでヨシュア記の指針が記されていますね。今朝注目させていただいています、ヨシュア記の最後のところで、彼が、「私と私の家は主に仕えます」と言い表したのは、主を畏れ、真心と真実をもって主に仕えるか、先祖がかつてユーフラテス川の向こうやエジプトで仕えていた神々や今住んでいる地のアモリ人の神々に仕えるかを、今日、選ぶように、イスラエルの全会衆に問いただした中でのことでしたが。そこで、これまでを振り返って、主に仕える、という信仰告白の中身を精査して見たいと思います。

【本論 主に仕えるとは？】

イスラエルの民が、そしてわたしたちが、主に仕えるという前提に、主が契約を思い起こされるということがあります。それは、出エジプトという神の出来事で証明された、主がお造りになられたものすべてを引き受けてくださった。ということがあります。

ですから、イスラエルの民が、そしてわたしたちが、主に仕えるというのは、まず、わたしたちも契約の当事者であるという信仰を告白することですね。それはまた、主の名を呼ぶことです。そこには、疑問に思った時訊ねる自由があり、主から提示された二者択一を選び取る自由があり、神の関心事を心に留める自由があるということですね。

イスラエルの民が、そしてわたしたちが、主に仕えることが恵みであるのは、主とわたしたちの間に結ばれた契約、そこに主が働かれるからですね。確執ある者たちの間に全能者が働かれて、隔ての壁である敵意を打ち壊して、そこにキリストの平和がもたらされるからですね。

よく言われることですが、主を礼拝するというのと、主に仕えるというのは、原語では同じことばが使われています。不思議なことに、聖書では、主を礼拝するというのは、すべてを失って、その失意のどん底でなされるものと表現されています。

「わたしは裸で母の胎を出た。裸でそこに帰ろう。主は与え、主は奪う。主のみ名はほめたたえられよ。」ヨブは東の国一番の富豪と呼ばれていましたが、持ち物すべてを失い、共に働いていた仲間を失い、10人の子どもたちを失ってしまった、その失意のどん底で彼は主を礼拝しました。さらに足の裏から頭の頂まで全身重い皮膚病に侵されても、「わたしたちは、神から幸福をいただいたのだから、不幸をもいただくのではないか。」と主を礼拝しました。それはまた、霊の苦しみのなかから語り、魂の苦悩の中から嘆くという信仰でもありました。そんなヨブのために、神は、友人との間に存在し

た因果応報という壁を、神との間に存在したように思われた神の不在と沈黙というふたつの壁を打ち壊してくださいました。ヨブの身に起こったことの背景を知らされずに、摂理を暗くさせられて神に向かって叫ばざるを得なくさせられてたんだね、ヨブは。と神に声をかけていただいたヨブは、神に顧みられ、慰められ、解き放たれました。それが彼が味わった神にとりなされている。でした。

モーセを指導者としてお立てになったイスラエルの主の物語は、終始一貫して「わたしのほかに神はいない！」に尽きます。鉄槌のようなこの指針は、出エジプトという430年にわたる奴隷の状態から主の過ぎ越しを通して主が導き出した救いに基づいて肝に銘じられることになりました。主が見守られ、戦われた、その目撃者となったイスラエルの民のそれは実感でもあったはずです。そして、この指針は、主の救いを経験した者の生き方の礎と位置付けられました。ほかの神々に仕えるならば、それが祟となるからであって、主がご自身の民の間に住んでくださるためでした。ところが、残念なことにご自身の民は、主を信頼することを学ぶことができませんでした。主は、このことを「わたしを聖としなかった」と言われました。しかしながら憐れみ深い主は、ご自身が聖なることを示されました。ご自身の民との間に信頼関係を回復してくださったのです。モーセは、約束の地を前にした同胞に、こうして主は誓われたことばを果たされる、と言いました。こうしてとは、イスラエルの民が非常な恐れを抱いた約束の地の先住民たちが、主からご自身の民を引き離そうとしているから、ということであり、恐れおののいていたご自身の民を立ち上がらせ、その恐れを取り除くことをも意味しました。かくして、約束の地を前にしたご自身の民に、他の神を礼拝し、仕える道ではなく、主を愛し、主の道を歩み、主のみこころに生きることを選び取る覚悟を主は促されました。「あなたは、命を選びなさい。」主は、このことばに命を注がれてわたしたちをも導かれるお方です。主の過ぎ越しを通して、ほかに神はいない！ことを実感したご自身の民も、主を信頼することを学び得ず、それでも憐れみ深い主は、ご自身の民との信頼関係を回復される。主から引き離そうとするものを根こそぎにされる。だから、命を選ぶのであって、そこに主は命をまた注がれるのです。

ヨシュアに、主がただ、わたしが命じたとおりに、とおっしゃったとき、それは、確実に履行されることを意味しました。託された使命は、主自らが実現されることでもそれはまた証明されました。アブラハムに約束されたことが、ヨシュアを通して730年後に現実のものとなりました。これは、主が約束されたことを主は決してお忘れにならないばかりか、人知を超えて確実に遂行されていることを物語って余りあります。ですから、主が言われた、が、主が約束された、であり、その計画が成し遂げられた、なのです。そのようにして、モーセの後継者ヨシュアは、「主に仕える」を証しました。

【結び】

祈っても何年もこたえがない、という方が、たぶん自分は間違った祈りをしてきたのだらうと感じ始めたというアパルームの記事（4/23）がありました。父親に怒りを感じてきたその方は、私を変えて赦しの心を与えてくださいと求めるようになったのです。すると、祈りのこたえがついにやってきました。神さまは、わたしの心を癒してくださったというのです。

人の子は、仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来た（マタイ20：28）。とあります。人の子と言われたお方、イエスさまは、わたしたちに仕えるために来られました。それは、わたしたちのために命を献げられたことでした。わたしたちは、このお方に何をもってお仕えしますか？